



# SIGNIS JAPAN ニュースレター

## タリタ・クム！ 起きなさい！

発行：SIGNIS JAPAN (カトリックメディア協議会)  
 代表：土屋 至  
 発行所：〒107-0052 東京都港区赤坂 8-12-42  
 聖パウロ女子修道会内  
 TEL 03-3479-3941 E-mail：info@signis-japan.org  
 http://signis-japan/org/

主のご降誕をお祝い申し上げます。

教皇フランシスコは、12月8日から「ヨセフ年」を宣言されました。世界中新型コロナウイルスの猛威に侵され今までとは違う窮屈な毎日ですが、日々の困難を耐え忍び、希望を示している聖ヨセフにならい、勇気を出して、新しい年に向かって一歩を踏み出しましょう。



### SIGNIS ASIA Webinar

日本の教会のコロナ問題に対する取り組みについて

片柳 弘史 神父  
 (カトリック宇部教会/イエズス会)



*"If you see Jesus in them, they will see Jesus in you."*

『あなたが（貧しい）人々の中にイエスを見出せば、人々もあなたの中にイエスを見出すでしょう』、マザーテレサの言葉です。」と11月18日シグニスアジア会議の初日のほぼ最後に片柳弘史神父の澄んだ声がオンラインでアジア20カ国約140名の聴衆の耳に響いた。…日本では組織だったSNS発信は難しいので、個人で発信している。マザーテレサのところでボランティアをしたのがきっかけで神父になった。本や写真集を出し、花や鳥の写真を撮り、福音を伝えている。我々は神様の愛の中に生きている。心配する必要はない。日本のCOVID-19は今第三波、将来どうなるかは誰も分からない。今は変革の時、以前は全国を回って講演して小教区の信徒たちとゆっくり話せなかったが、今はずっと小教区にいる。人々の顔を見れば、何をして欲しいのかが分かる。人々を見れば、人々を愛せざるを得ない。それはCOVID-19の恩恵といえる。



(注) 片柳神父のスピーチはYouTubeでご覧になれます。現在日本語字幕を製作中

<https://youtu.be/bkqg5k8XvHM>

★写真(左)：片柳神父撮影

### SIGNIS ASIA 一はじめてのオンラインによるウェブ会議ー 報告

11/18-20の3日間シグニスアジア会議がZoomを使って開催された。(写真)140名+120名+40名の延300名と過去最大。日本からは片柳神父様を入れて8名が参加した。最初の2日間はスタディーデー「Covid-19：メディアの役割とコミュニケーション、コロナ禍を乗り越える」と題して各国の有識者や聖職者ほか18名が各地の状況や活動内容、どう受け止めるか、そしてどう立ち向かうのかについて報告があり、議論があった。特に弱い人々-貧しい人々、移住労働者、難民が最も影響を受けている現状や、これら弱い人々へ手を差し伸べる必要とその実際の活動の紹介があった。決して希望を捨てずに恐れずに人々と連帯して特に貧しい人々に寄り添おうとの発言が多かった。誤報はコロナ自体よりも悪質であり、事実に基づくメディア訓練の必要性への言及もあった。もしメディアが妥協すれば、それはもはやメディアではない。マレーシアからは人身売買が横行との悲しい報告もあった。インドのバラナシでは宗教に関係なく食料品を分配したり、仕事を提供したりしている。各地でそれぞれ工夫している。



最終日はビジネスデーで活動報告、決算報告の後にバングラデッシュ、東チモール、日本が活動実績と計画を報告、スクリーニングコミティからはプロジェクト申請の仮まとめ報告(対昨年半減の可能性)、各デスクからの報告、2022世界大会、2021アジア会議開催国立候補等があり、無事にアジア会議を閉幕した。今回は他の地域は年次会議を延期したが、シグニスアジアのみオンライン開催したエネルギーは素晴らしい。また多くの国からスピーカーが生まれ、また数多くの人々が参加出来たのも良かった。今回は日本から片柳神父様が素晴らしい発信をされたことが最大の喜びです。理性中心の他国のスピーカーに対して、神父様は日本人の自然と一体化した心情と神様の愛への信頼を多くの人に印象付けることができました。(事務局長 町田)

## 努力と信頼 2020年シグニスアジア会議参加報告

2020年のシグニスアジア会議は、今般の状況で最も貧しく影響を受けやすい人々に対するメディアの役割というテーマで開催されました。初日のみの参加のため視聴した範囲は限られていますが、その感想を簡単にまとめたいと思います。

### 格差の中から

最もインパクトがあるのはやはりインドです。インドでは、パンデミック発生の早い段階で都市封鎖を行った結果、都市で職を失った大勢の出稼ぎ労働者が地方へ移動する事態が生じました。このような人々がどの程度インターネットを通じた支援を利用できるのか危ぶまれます。というのは、先進国では多くの人々がインターネットにアクセスできるのに対し、途上国ではオフラインの人々がはるかに多いからです（たとえば総務省「世界の統計2020」<https://www.stat.go.jp/data/sekai/pdf/2020al.pdf> 140頁を参照）。授業のオンライン化により、教育格差も深刻になります。

このように、安全から始まって、収入、教育と連鎖的に格差が拡大しています。私たちは自宅からオンライン会議に参加できる時点で、感染の危険の少ない安全な環境にいること、インターネットに接続できる状況にあることを自覚させられます。

### 宗教の二つの役割

手元に配布された資料の中から、インドの神学者 Selvaraj 師の指摘を報告したいと思います(Covid-19: *The Role of Media & Communication and Moving Beyond*, Webinar Presentation, 29)。宗教には機能的 functional な役割と遂行的 performative な役割がある。機能的な役割とは、メンバーをある考え方や儀式、行動様式などに結びつけることであり、遂行的な役割とは、社会との関係で何をやるかということである。カトリック教会がこれまで行ってきたことは前者であるが、昨今の状況では、後者の重要性が増している。

簡単に言い換えると、「どうすれば教会に人が来るか？ どうすれば人々はキリスト教を受け入れるか？（＝自分のところへ人を呼んで仲間にする）」という問いよりも、「キリスト教徒である私たちはどう行動すべきだろうか？（＝必要としている人のところへ自分が行って仲間になる）」という問いを自分に投げかけるべきだということになるでしょう。これはインドでも日本でも同じことだと思います。

### 片柳師のお話

他方で、インドと日本の問題すべてが同じではありません。日本では格差の拡大はもっと静かで冷淡です。日本では、労働者が解雇されて生活に困っても、「そんな仕事を選んだ自分の責任だ」「自分の努力不足だ」という言葉がかけられることがあります。マザーテレサが指摘したように、日本人の貧しさとはこのような冷たさではないでしょうか。

マザーから「人々の中にイエスを見るなら、人々はその人の中にイエスを見る」と学ばれた片柳弘史師は、日本の状況についてアジア諸国の参加者に話されました。師は、日本のキリスト教徒がとても少ないことや、日本の田舎で撮った自然の写真をシェアしている理由などを話されました。師が自然の写真をシェアするのは、「空の鳥を見なさい」という福音書の言葉を思い出すためだそうです。私たちが困っている人々の心配をする以上に、現に神がその人々の生命を支えておられることを思い出します。

### 努力と信頼

日本でも、本当に本当に困っている人はオフラインかそれに近い状況にあるのではないかと思います。オフラインの人をインターネットにアクセスできるようにすることも大切です。映像と音声でプレゼンテーションが行われている間、チャットも活発でしたが、あるメンバーのグループでは、子供たちが授業をオンラインで受けられるように、中古のスマートフォンを集めて配ったと報告していました。それと同時に、貼り紙のようなオフラインのメディアも実は有効なのではないかと思いました。私たちの工夫が人間的な努力であるだけでなく、空の鳥のように神の助けのもとにあることを心に留めたいと思います。

矢ヶ崎紘子(SNN-AMOR)

## SIGNIS JAPAN

～新しい時代に向かって～

コロナ禍により、私たちはまさにシグニスのテーマである「インターネットによる福音宣教」をより積極的に進めることになりました。そこで、シグニスが新しい時代に向かって何をしたいか、どのような展開ができるかを考えてみました。

### コロナ禍でのカトリック映画賞を考える

映画チーム

私たちシグニス ジャパンもこの新型コロナウイルスの影響を少なからず受けました。今年のカトリック映画賞は『こどもしよくどう（監督 日向寺太郎）』。毎年6月に「なかのZEROホール」で行っている「授賞式 & 上映会」の開催が中止となりました。そのため、7月4日に授賞式と日向寺太郎監督と晴佐久昌英神父との対談をカトリック浅草教会で行い、その模様を動画配信することになりました。また、それだけではなく、来年の「カトリック映画賞」をどのようにすればいいのかという課題を私たちは負わなければならなくなったのです。

ただ、新型コロナウイルスのために普段なら行わない、Zoomでの定例会を行っているせいか、私たちも「オンライン」の活用を身近なものとすることができました。いま私たちの目標として、来年の「カトリック映画賞」をオンライン上でできないかという試みの道がかすかですが開きつつあるということです。それだけではなく新たな協力者を得て、劇場での上映 & オンライン上映が可能になるかもしれない、という今までは考えることができなかった道が開かれようとしています。

もし、オンラインでの「カトリック映画賞」が実現できれば、今まで「なかのZERO」で行っていた時よりも、さらに多くの人がこの「カトリック映画賞」に触れることができ、日本全国まで広げることができそうです。

私たちは、「カトリック映画賞」を通して映画の中にある「福音」を伝えようとしています。今までは、「なかのZEROホール」という限られた場所を通しての福音宣教でしたが、もし、オンラインでの上映会ができるのであれば、より多くの方に福音が広がるのではないかと思います。おん父は、コロナ禍の中でも福音を伝えるという可能性を私たちに示してくださったのではないのでしょうか。

さて今年は、コロナウィルスの感染拡大という危機の中でも上映している映画館を通して、日本映画を観ることができました。その中で私たちには、『フクシマ 50』『風の電話』『フリーズン・サークル』『友達やめた』『花のあとさき』ムツバあさんの歩いた道一』などの映画が特に印象に残っています。まだまだ、良い映画があるかと思いますのでメンバーでこれからも映画を観ていきたいと思います。

## スマホでできる動画伝道ワークショップ インターネットチーム

今年の2月ごろ、まだコロナの非常事態宣言が出る前に「キリスト新聞」に「スマホでできる動画伝道ワークショップ」の開催の案内が載っていた。わたしはこの記事を読んで「これぞまさにシグニスで行いたいこと。ぜひともこのワークショップとコラボしたい」というインスピレーションが湧いてきてさっそく申し込んだ。

このワークショップの第1回目のテーマは「教会ドキュメンタリーの作り方」というものであった。第1回目の3/20に教団鳥居坂教会のワークショップに参加して、このワークショップを主催する片岡賢蔵さん（写真）にお会いした。彼はテレビ東京の「カンブリア宮殿」という番組のプロデューサーをやっていた映像制作の現場にいた人であった。そして今は、東京神学大学の大学院に在学中で卒業したら牧師としてどこかへ派遣されるという立場におられた。さらに私は今年4月までここ何年かイエズス会の経営する鎌倉十二所黙想の家にボランティアで通っていたのだが、その黙想の家の下にあった日本基督教団鎌倉泉水教会の信徒であったこと。片岡さんとお会いするのはどこか運命的な出会いであったように思えたのだった。

このワークショップで語られた片岡さんのメッセージの中にこういうのがあった。「教会のドキュメンタリーというのは、例えばこういうものです。幼児洗礼の映像がありました。この幼児洗礼の時にギャーギャー泣いていたこの子は今このように大きくなりました。あるいはある日の礼拝の映像を映していた動画に登場するこの女性はすでになくなっていますが、この人はこういう人でしたねといっってその人との思い出をいろいろな人が語り出すきっかけになりました。こういう教会ドキュメントを教会の中に意図的に蓄積しておきたい、それがこのワークショップのねらいです。」



片岡さんにとって、このワークショップがカトリックの参加が得られることは「願ったり叶ったり」のことであったと思う。ここにコラボが成立した。かれはこのワークショップの会場としてカトリック教会を使えないかという希望を述べてきた。私は晴佐久神父の上野・浅草教会はどうかと提案し、さっそく晴佐久神父に打診してみた結果、9/19の第3回ワークショップを晴佐久神父の教会で行うことが決まった。

第2回の5/16のワークショップはオンラインで参加するひとと実際に会場に出席してリアルに参加するひととで構成されたハイブリッドワークショップであった。この日はプロテスタントの教会やカトリックの教会でも行われている「ミサ・礼拝のライブ中継の進め方」について話されていた。これはまさに時代が求めていたタイムリーなテーマであった。

第3回のカトリック浅草教会のワークショップももしろかった。そのときに片岡さんが用意されていたユニクロの映像を見ての感想を述べるときの晴佐久神父のメッセージが印象に残っている。「この映像の中で最もよかったのは、避難所ではいているサンダルばきでユニクロに来てしまった女性の映像でしたね。あれが最も被災地の女性の真実を映し出している」というものだった。

これらのワークショップの様子を見て私たちは2021年の2月27日に行われる「第43回『教会とインターネット』セミナー」に片岡賢蔵さんを講師として招くことを決定した。（土屋）★セミナーチラシ準備中

## 2022年シグニス世界大会に向けて

事務局

2022年8月、韓国・ソウル市のソガン大学（Sogang University）にて、「デジタル世界における平和」をテーマに、シグニス世界大会（SIGNIS WORLD CONGRESS 2022）が開催されます。そこにシグニス ジャパンのブースを設け、日本のカトリック、キリスト教について紹介することになり、今年8月から事務局を中心に韓国との交流に興味を持つ賛助会員他も参加して、月1回 Zoom 会議を開いています。

韓国は東アジアで最もキリスト教信者が多く、その活動も大変盛んです。1970年代の民主化運動の時に、キム・スファン（金寿煥）枢機卿が、政権に反対した活動家を明堂聖堂にかくまったことは、教会が民衆の側に立つことを示した大きな出来事でした。最近では、日韓共同での「日韓脱原発巡礼」などを積極的に進めており、韓国の教会に学ぶことが多くあることに気づかされます。『日韓でいっしょに読みたい韓国史—未来に開かれた共通の歴史認識に向けて（2014年/明石書店）』は、日韓司教交流会の成果として作られたものですが、すばらしい資料と思います。

私たちは、まずは韓国のキリスト教の歴史を勉強することから始めて、日本から紹介できるものは何か、例えば殉教の歴史や殉教地、現在の日韓の青年、教会間での交流など資料を探しながら、有意義な話合いの場を持っています。出展では紙媒体の展示だけではなく、小さなブースからインターネットを介して世界に向けて発信したいと思います。世界から私たちシグニスジャパンを見ていただくことで、新しい発展につながると期待しています。

日韓の間には、日本が犯した問題が今も解決されず政治的には難しい面もありますが、一方民間ではお互いの文化に興味を持ち、親しい交流も続けられています。キリスト者としての視点から歴史を見直し、隣国韓国と本当の意味での、「近くて近い国」になる道を歩みはじめ、全体のテーマ「デジタル世界における平和」に向けてこの課題に取り組みたいです。（泉）



ソガン大学構内のキリスト像

## シグニスメンバーから “私のひとこと”

今年は思いもかけない新型コロナの日々となり、6月の第44回日本カトリック映画賞の上映会は中止になって、来年の上映会場も確保できず、定例会さえも開けない、という八方塞がりのシグニスジャパン。でもピンチはチャンス(ちょっと古いな!)、なんと来年は今までと違う形式での日本カトリック映画賞上映会開催の可能性が出てきました。平均年齢かなり高め、シグニスジャパン、来年は新しいことにチャレンジできる、そして念願の世代交代の可能性だってあるかもって、これ新型コロナの思いもかけない効果かもしれませんね。さてさてどんな展開になるか、乞うご期待!! (大沼)

今年は、コロナにふりまわされましたが、それでも、いろいろな工夫もできた年と言ってもいいでしょう。来年は、コロナ禍の中でも希望のうちに歩んで行きたいと思っています。(Br.井手口)

こんなに家に居たこと初めてです。実際に観て、聴いて、匂いを嗅いで、『生』が一番と思っている私には、リモート、バーチャル、と言うことになかなか馴染めませんでした。でも一変した世の中、新しい日常、ニューノーマル時代と言われる今、一歩ずつ前に踏み出して行かなければ。(増田)

コロナで確かにつらいことがあります。でもコロナ禍といいますが、コロナがもたらしたのは“禍”だけではないと思っています。コロナは私に気づかせてくれました。本当に大切なこと。本当に大切なひと。会えなくても、離れていても私たちはつながっていることをコロナは教えてくれました。(鈴木)

教会に集うことができない、不思議な一年でした。しかし、離れたことで、わかったこともあります。ただ、常に忍耐の連続ではなく、普段教会で共に礼拝する喜び、対面での人間関係、共に食事する楽しさなど、ちいさな幸せに目を向けるようになりました。(酒井)

小さなウイルスの脅威。この小さな小さなウイルスが世界を一変させました。あな、恐ろしや! いつまでこの悪魔と戦うのでしょうか。しかし、コロナの影響で、オンラインの普及は目を見張るものがあります。シグニスの定例会も、Zoomによる話し合いが定番となりました。最初は音と画面の調整が大変でしたが、画面をとおして意見を言うことも上手になりました。経済的には厳しいけれど、明日の社会への希望を失うことがないように、主の導きを願います。(Sr.清水)

今年は今まで望んでいたミサの同時配信が公式に開始されて教会が遠くて、また足が悪くて、また病床でミサに与れない方々も心の中でしっかりとミサに与れた記念すべき年となりました。また逆にミサでのご聖体拝領がどんなに励みになっていたかを実感できる年でもありました。シグニスはメディアで平和の文化を発信・宣教するのだということを実感できた年でもあります。何よりもシグニスのアジアの仲間、片柳神父様の声を届けることができたのが収穫でした。神父様の仰る通り、コロナの恵みだと思います。

(町田)

いつもの日常がまったく変わり、これまでの教会生活も、遠い記憶のようになってしまいましたが、自然の美しさ、その恵みは変わりなくあることを実感した一年でもありました。教会仲間とは日曜日の午後Zoomで交流して、さまざまなことを分かち合っています。日常なことから、読んだ本の紹介、普段の教会ではできなかったような神学的な深い話に発展したり、とても貴重な体験です。これからの世界がどうなるかわかりませんが、“いつも喜んでいなさい”、この言葉を胸に、新しい世界に夢と希望を持ちたいと思います。(泉)

大変な一年でしたが、その中で皆さまからのご支援に心より感謝いたします。シグニスの新しい展開にご期待ください。

どうぞよいお年をお迎えくださいますように!

シグニス ジャパン一同



## 賛助会員募集

わたしたちSIGNIS JAPANの活動をサポートして下さる賛助会員を募集しています。

会員の方には、ニュースレター「タリタ・クム!」(年3回発行)をメールまたは郵便にてお届けする他、賛助会員と共に捧げる感謝のミサを東京地区で行っています。詳細は賛助会員の皆さまにご連絡させていただきます。

年会費 3,000 円。ご入会いただける方は、氏名、住所、連絡先を下記までお知らせ下さい。どうぞよろしく願いいたします!

〒107-0052 東京都港区赤坂8-12-42  
聖パウロ女子修道会内 SIGNIS JAPAN /  
[info@signis-japan.org](mailto:info@signis-japan.org)  
会費およびご寄付は、下記へ振込みをお願いいたします。

郵便振替 口座番号 00100-0-594547  
口座名称 SIGNIS JAPAN 代表者 土屋 至